地域活動組織の始動過程の記述に関する考察
ーレトロ納屋橋100年実行委員会を事例として

井村　美里[1]・秀島　栄三[2]・中川　慎也[3]

[1]正会員　名古屋市総務局総合調整室（〒460-8508 愛知県名古屋市中区三の丸3-1-1）
E-mail: m.imura.68@city.nagoya.lg.jp

[2]正会員　名古屋工業大学大学院工学研究科（〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町）
E-mail:hideshima.eizo@nitech.ac.jp

[3]学生会員　名古屋工業大学工学部都市社会工学科（〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町）
E-mail:23117070@stn.nitech.ac.jp

地域の主題に地域で自発的に対応していく活動が増えている．一般的に活動を進めるには何らかの組織を立ち上げるが，組織が継続的に運営できるようになるまでに幾多の障壁がある．障壁を明らかにし，かつ障壁を解消するための方策を検討するために，本研究では，組織が始動するプロセスを明確に記述する方法について考察する．ヒアリングにより得た情報は必ずしも客観的でないこと，始動過程は極めて短期であること等に考慮が必要と考えられる．本稿では，レトロ納屋橋 100 年実行委員会の始動過程を対象として「個人年譜一覧」を作成し，構成員の組織への関わりをできる限り客観的に捉えた．本手法により構成員の行動と意識の変化，参加の程度，構成員相互の関係性などを考察することができた．

Key Words : *regional activities organization,participatory planning, start-up, chronology, interview*

1.　はじめに

地域の主題に地域で自発的に対応していく取り組みが増えている．課題を解決しようとするもの，地域の魅力を向上させようとするものなど様々な動きがある．そして一般的に活動を進めるには何らかの組織を立ち上げるが，組織を立ち上げる際には地域課題の認識共有化や設立時のルール作り，活動内容等に関する合意形成，資金調達や運営のノウハウ不足，人材獲得の難しさなど，組織が継続的に運営できるようになるまでに幾多の障壁がある．

そこで，こうした組織を立ち上げるプロセス上の障壁を明らかにし，かつ障壁を解消するための方策を検討するために，本研究では，このようなプロセスを明確に記述する方法について考察する．このために関係者の立場や関心事と行動の変遷を明らかにすべく当事者にヒアリング等を行うことが適当と考えられる．ヒアリングで得たい情報としては，組織の設立にあたり生じた具体的な課題への対応，設立契機，課題や目的意識の共有，人材，資金など体制や仕組み等に関する合議過程，組織設立を誘発した要因，立場の違いによる組織への関わり方の相違などがある．しかしながらこれらに関する情報がどれだけ客観的なものとして得られるかは定かでない．そして組織が設立するまでのプロセス（以下では始動過程という）は極めて短く，かつ様々なことが並行して進む可能性がある．また個々の所作が合理的に熟慮されたたものとは限らない．地域活動組織の始動過程を記述する上でこれらの点において十分な考慮が必要と言える．

2.　始動過程の事例とその記述

(1)　地域活動組織の事例

本稿では，地域活動組織の事例としてレトロ納屋橋 100 年実行委員会を取り上げる．名古屋市の納屋橋地区は，名古屋駅と栄の都心を結ぶ広小路通と，名古屋城と熱田神宮を結ぶ堀川が交差する位置にある．堀川は昭和 40 年代まで舟運に利用され両岸の人々は川側を向いて生活し，広小路通は 1989 年（明治 31 年）の路面電車開通から 1971 年（昭和 46 年）の廃止まで多くの人が行き交うメインストリートであった．川と道の接点である納屋橋のたもとには，船の荷を陸揚げする公共物揚場が設けられ，堀川と名古屋の街なかをつなぐ交通の要となっていた．しかし，舟運の衰退，水質の悪化

等により人々は川に背を向け，付近は風俗店が多く並ぶ地域になる．川や幹線道路は行政界となり，小学校区，町内会など既存の地域組織のエリア端となり，地域のまとまりを形成しにくい状況にあった．川との関わりを残す歴史資産や整備された水辺空間，堀川に関わる団体の賑わいの取り組みがあるにも拘らず，資源を活かしきない状況であった．しかし，1913 年の納屋橋架橋から 100 年を機に，地域の意識を変え，まとまりを強化し，魅力発信をしていきたいと地権者等が動き出し，2013 年 3 月に本研究の事例とする，レトロ納屋橋 100 年実行委員会（以下「実行委員会」という）が立ち上がった．

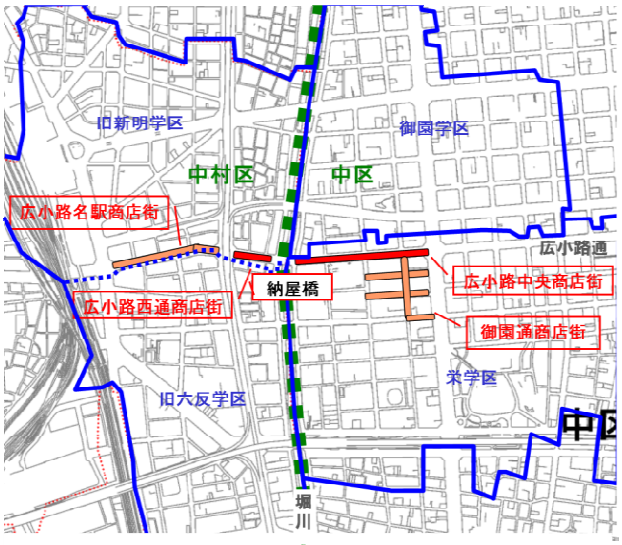


図１　納屋橋地区にある既存組織の境界線

実行委員会という組織の始動にあたり、規約に活動目的や活動内容，活動資金等について定めた．実行委員会に加入できる者は，「納屋橋地区の活性化を目指し自ら行動できる個人，団体とし，委員となる者は納屋橋地区の土地所有者または借地権等の使用収益権を有する者（以下「地権者」という）」とし，地権者ではないが，資金，労力，ノウハウ等何らかの形で実行委員会に協力をする者はサポーターと位置付けられている．

設立時の委員は以下の8名であった（以下この8名を示す場合に「構成員」という）．

Ａ氏：実行委員会の委員長を務める．1905年，祖父の代に飲食店を創業し，1953年，父の代に納屋橋近くに本店を構える．Ａ氏の代にこの地での店舗営業を止め，建物の賃貸をしている事業主．納屋橋に隣接する商店街振興組合の理事長を務める．

Ｂ氏：実行委員会の事務局長を務める．1945年，祖父の代に納屋橋詰めでダンスホールを始め，劇場，飲食店などを経営，Ｂ氏の代で川側の遊歩道整備に合わせて建物を建て替え賃貸している事業主．

Ｃ氏：1946年，祖父の代から納屋橋詰めで物品の製造販売を行う店舗を始め，その後継者．名物店主だった祖父の死後，2013年に創業以来初となる大がかりな店の改装工事を実施．実行委員会の委員の中で唯一，納屋橋近くに居住する．

Ｄ氏：1906年から納屋橋近くに位置し倉庫業を営む会社の従業員．納屋橋近くで現在進行中の市街地再開発準備組合の理事長を務めており，その肩書きで実行委員会に参加．

Ｅ氏：2008年に納屋橋詰めの市有地活用に公募で選定された会社の従業員．土地を定期借地し飲食店として出店，3年後に自社による店舗経営を止め，建物を賃貸する業態になった．実行委員会には会社として参加．名簿は社長名で登録．

Ｆ氏：2011年から納屋橋詰めの市有地にある建物を賃貸し飲食店を経営する会社の従業員．実行委員会には会社として参加．名簿は社長名で登録．

Ｇ氏：1913年の納屋橋渡り初めに縁のある商品を扱う物品販売店の分家後継者．1918年に開業した分家は他所で営業していたが納屋橋架橋100年を機に，納屋橋近くの本店跡地に移転．実行委員会設立時は出店準備中．

Ｈ氏：1937年から納屋橋近くに位置し海運業を営む会社の従業員．実行委員会には会社として参加しており名簿は社長名で登録．納屋橋に隣接する商店街振興組合の理事長も社長名で担う．

(2)　記述方法の検討

上記の事例に対し，文献調査及びまちづくり組織構成員に対するヒアリング調査，現地調査を実施する．これらをもとに，納屋橋を拠点として取り組まれてきたまちづくりに関する活動や事実を100年前の納屋橋架橋渡り初め式から実行委員会設立に至るまでの間の時間軸で整理し，構成員の納屋橋地域のまちづくり活動へ関与した事実とその時々の参加意思の程度を年表にし，参加の過程を可視化する．以下では，これを年譜ということとする．構成員のまちづくり活動への関わりをできる限り客観的に捉える為に，参加意思の程度を数値化したグラフを作成している．ここでいう参加意思とは，構成員がまちづくり活動に関与した際のきっかけや感じたこと，思い入れなどを示している．個人年譜の縦軸は時間経過を表し，横軸に納屋橋のまちづくりに関する事実や事象，構成員の行動，参加意思をヒアリング議事録から抜粋して表記し，最右にこれらから読み取れる参加意思の程度を数値化した参加段

表１　住民参加のはしご

3	自発的な力が生かされる参加	コントロール（プログラムや組織運営の自治権を持っている，周囲を巻き込む活動）
		委任されたパワー（大きな決定権が与えられ，自ら主体となる活動）
		パートナーシップ（目的と決定権が共有された活動）
2	納得した参加	懐柔参加（意見の合法性や正当性の判断を権力者が保留した状態の参加，活動内容に納得した上での参加）
		意見聴取参加（意見は聞くが必ずしも活かされる保証がなく行われる参加，与えられた役割の内容を認識した上での参加）
		お知らせ参加（一方通行の情報伝達に終わりフィードバックや意見を述べる機会が与えられない限定された参加）
1	自発的な参加とは言えない	セラピー参加（参加者が抱いている不満感情をなだめることを目的とした参加）
		操り参加（決定権を持つ人が自分の意見にサポートを得ることを目的とし，参加のアリバイ道具としての形だけの参加）

階を記している．参加意志の程度を数値化するにあたっては，表１のシェリー・アーンスタイン[1] が住民参加の形態を8分類した「住民参加のはしご」 を尺度とし，参加型会議を創造的に実施する理論と実践の体系を「参加のデザイン」として整理した世古一穂[2] の大きな3つの分類を参照している．

実行委員会の構成員全員の個人年譜をまとめたものを「個人年譜一覧」と呼び，表２に示すようにグラフ化する．グラフ表現による可視化の手法は高橋[3] を参考にしている．個人年譜一覧のグラフの縦軸には実行委員会の構成員を並べて表記し，横軸下段には，納屋橋を拠点として取り組まれてきたまちづくりに関する活動や事実の主なものを「納屋橋の出来事」として1985年から2010年までは5年単位で，2012年からは3カ月単位で時間経過に合わせて表記する．構成員ごとの横軸のグラフは，納屋橋のまちづくりに関する活動に対する構成員の参加意思の程度をグラフの塗りつぶしの程度によって示しており，塗りつぶしの濃いものほど参加の度合いが高いことを示す．グラフの始期は，構成員が納屋橋のまちづくりの活動になんらかの関わりをもった時点を示している．

3. 記述に基づく考察

(1)　構成員の意識変化の把握

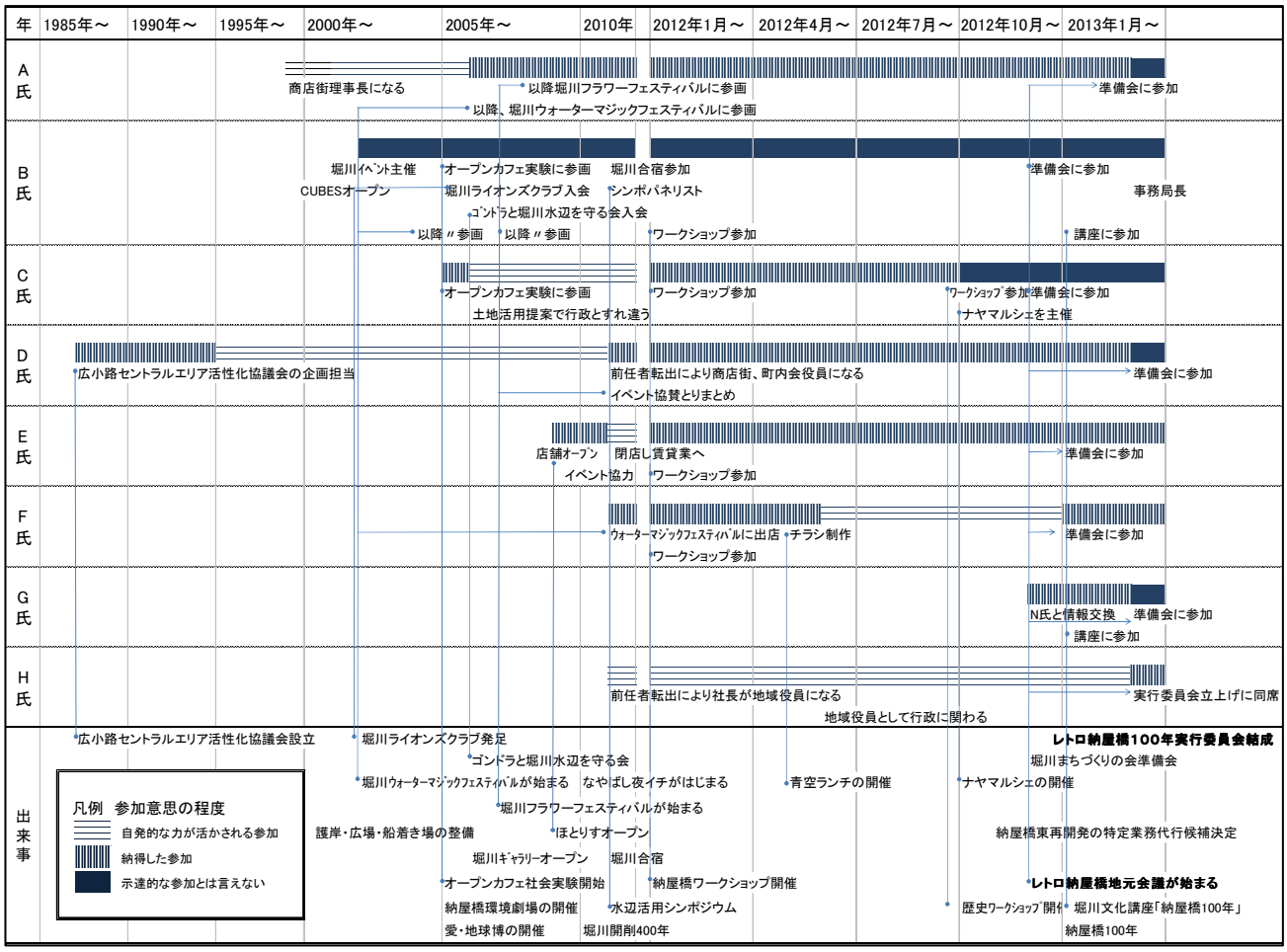
長期的な時間経過にみられる構成員の行動と参加意思の変化，まちづくりに関連する事象や事実と構成員との関係や過程を明らかにし，構成員の立場の相違によるまちづくり活動や実行委員会への関与の仕方や参加の程度について関係性を分析する．

個人年譜一覧から，実行委員会の構成員が納屋橋のまちづくり活動に関わり始めた時期が，1985年から1990年，2000年から2005年，2010年以降の３つの時期に大別できる．長期的な時間軸におけるムーブメントとして，1989年の世界デザイン博覧会で堀川沿いの分散会場を結ぶ堀川の整備が核事業として位置付けられ、広く市民を巻き込む動きを持って行われた堀川総合整備構想の策定時期，納屋橋地区の護岸整備にあわせて賑わいの取り組みが増加し，2005年の愛・地球博をメルクマールとしてハード整備とソフト事業が動き，堀川に関わる市民が動きはじめた時期，2010年の堀川開削400年祭として堀川全域の関係団体やイベントの集大成となる様々なイベントを堀川沿い各地で開催し，納屋橋では2013年の架橋100年が意識され始めた時期である．それまで違う方向を向いて進み，あるいはその場で立ち止まっていた構成員が納屋橋100年をきっかけに「納屋橋100年になにかしなければ」と同じ方向を見るようになり，時機を逸したら次はないという余儀ない状況を認識させ，人々の意識と行動を変える契機となった．構成員を地域のまちづくり活動に巻き込んだこれらの取組みは，活動期間を限定し終期を暗示，参加のハードルを下げるムーブメントになっていたと考える．

(2)　立場立場の違いが生む関与の違い

個人年譜一覧からは実行委員会設立時に参加の意思の程度が自発的な力が活かされるレベルに達していない構成員を含んでいることが分かる．活動目的を「納屋橋地区の活性化をめざし，納屋橋架橋100年を記念した広報活動の企画・実施」とする実行委員会への参加については全ての構成員が納得しているが，自ら企画・実施に関わり行動を伴うレベルに達していない構成員は，ヒアリングの中で顧客が限定された事業であるため地域の賑わいや人通りは自社利益に無関係と答えている．一方で、建物賃貸業を営む構成員は、賑わいや人通りを歓迎し，地域全体の利益のための活動の

表２　個人年譜一覧



背後に，自己の受益を重ねて捉えることが，強い関心を持って実行委員会へ参加するモチベーションになることが分かった．しかし，地域との関わりが長い構成員ほど，自己利益追求だけではない地域への愛着や多
面的な関わりの蓄積が実行委員会への参加を促し，関与する動機につながっていること等が明らかになった．

4.　おわりに

本研究では，実行委員会の始動過程における，構成員の堀川や納屋橋のまちづくり活動への関与，参加動機や期待等をヒアリングした記録をもとに，構成員の行動と参加意思を数値化したグラフにし，参加の過程を可視化する「個人年譜一覧」を作成し，構成員の地域まちづくり組織への関わりをできる限り客観的に捉えた．これは，時間軸における構成員の行動と意識の変化の特徴を明らかにすると共に，構成員の立場の相違によるまちづくり活動や組織への関与の仕方や参加の程度の違いを明確に示すものである．また，構成員相互の関係性を分析するのに，有用であると言える．

参考文献

1) Arnstein, Sherry R.：A Ladder of Citizen Participation, JAIP, Vol.35, No. 4, pp.216-224, 1969.

2) 世古一穂：協働のデザイン― パートナーシップを拓く仕組みづくり，人づくり，p.40，2001.

3) 高橋敬宗：郡上八幡におけるまちづくりの展開プロセスに関する研究，早稲田大学修士論文，2005.

(2014.8.1 受付)

A STUDY ON METHOD OF DESCRIBING THE STARTUP PROCESS OF REGIONAL ACTIVITIES ORGANIZATION BY A CASE OF RETORO NAYABASHI 100 NEN JIKKO IINKAI

Misato IMURA, Eizo HIDESHIMA, Shinya NAKAGAWA